

研究論文

夜間中学における若者支援

井上 大樹

北翔大学 北方圏学術情報センター

抄 録

日本でも若者自立支援への注目が進む中で、義務教育未修了者の学びの場である夜間中学でも不登校や引きこもりを経験した若者が学んでいる。そこでの学びは、単なる文字や言葉の獲得に止まらず、社会的自立へのプロセスを経ていると考えられる。そこで、若者自立支援における議論をもとに、「学びにおける治癒」、「学びの社会化」、「学びの自主化」の3つの視点から事例検討を行った。

その結果、夜間中学は「学びにおける治癒」及び「学びの社会化」を展開する中で、これまでの学校生活で負った傷を癒し、他者や社会への基本的信頼を得られることが明らかになった。また、オルタナティブな学びである夜間中学に対し、その場を変革し創造する「学びの自主化」こそが、社会適応に止まらず社会を創造しながら自立を試みる学びに結びつく可能性がある。

キーワード：社会的引きこもり，社会的自立，基本的信頼，移行期

I. はじめに

日本における義務教育未修了者は約160万人と言われている^{注1)}。しかし、この中に不登校による形式卒業者、国外からの移住者やその子どもの未就学者などを含めると200万人余りに達すると言われている^{注2)}。義務教育未修了者に対する学びの場として夜間中学がある。昼間の生徒と同じ条件^{注3)}で学べる公立夜間学級は8都府県に35校しかなく、在籍者数はここ30年ほど、2500人～3000人で推移している^{注4)}。このような現状に対し、2006年には日本弁護士連合会より人権救済意見書^{注5)}が文部科学省へ出されるに至った。しかし、一部の地域を除き、公立夜間学級の増設を含めた義務教育の学びの場の拡充は進んでいない^{注6)}。公立の夜間学級のない地域では、ボランティアによる自主夜間中学に限られた条件の中で義務教育未修了者へ学びの場をつくっている^{注7)}。

一方、ここ数年の若者就業支援政策などのでこ入れにも関わらず、「若年無業者」は60万人台の横ばい傾向である^{注8)}。この「若年無業者」にはニート及び社会的引きこもりが含まれる。社会的引きこもりは、「若年」より年齢が高い場合を含めると100万人超に達する^{注9)}。社会的に引きこもりについては、様々な要因やきっかけがあるとされていたが、近年は不登校の長期化が傾向として

指摘されている^{注10)}。学校を中絶した場合の社会へのルートの確立が急務であり、若者自立支援施設・機関が担っている^{注11)}。

夜間中学では、1970年代後半から東京都を中心に不登校経験者の受け入れを行うようになった^{注12)}。一度、学校を「拒否」せざるを得なかった彼／彼女らが学校に通い続けることには困難を極めたが、中には高校や大学へ進学し、アルバイトをしながら仕事を得るに至った例も見られる^{注13)}。また、「形式卒業」でも柔軟に受け入れができる自主夜間中学でも不登校や引きこもりを経験した若者が通っており、一念発起して高校へ進学するなどの例もある。つまり、夜間中学には「社会へ出ること」や「自立へ向けた歩み」を後押しする機能をもちうると考えられる。

公立、自主を問わず、夜間中学を定義するとすれば「(実質的)義務教育未修了者の学びの場」とすることに大方の異論はないであろう。その「学び」の質を問うにあたり、社会生活や社会に訴えるための獲得される「言葉」「文字」についての議論は枚挙にいとまがない。しかし、社会的自立へ向けた学びには、自らを表現し自ら外の世界(社会)へ出ようという意欲が不可欠である。それは、学びの場への信頼というべきものであり、自らの「言葉」「文字」を獲得する前提とも言える。

そこで本論文では、若者(自立)支援という視点か

ら、ある若者の学習過程の分析を通じ、夜間中学の機能について新たな知見を得ることを試みたい。

II. 夜間中学の学びをめぐる議論

1. 学習内容の側面から

夜間中学の学びをめぐる議論としては、学習内容に関するものがほとんどであった。それは、「生きるための学び」に何が必要かということであるが、この点に関して歴史的に東京都と大阪府の公立夜間中学のスタンスの違いが興味深い。¹⁴⁾

比較的早い段階で外国人労働者やその子弟を迎えることになった東京都の場合、日本の社会生活への適応が中心的課題であったため、クラスによって¹⁵⁾は日本語主体のカリキュラム構成になっている場合もある。

しかし、大阪府では日本語によって他教科の授業時数を削ることは「義務教育の実質保障」に反するという。また、学習権保障の運動との連動、具体的には夜間中学の増設、条件整備（あるいはその改悪に対する反対）に生徒が参加することを通じ、社会に訴えることのできる「コトバ」を獲得することを目指している。

これ以外の府県でも生徒構成の違いにより、必要とされる学習内容は異なる¹⁶⁾。実際、授業に関する議論では獲得する「文字」の性質を問うものがほとんどであった。その一方で、その学習を成立させる条件、特に「学びの場」における教師と生徒、生徒同士の関係を問う議論はほとんど見られなかった。

しかし、公立も自主も生徒が多様化するにつれ、学習ニーズも多様化が進んだ。「個」に応じた学びが求められる一方、外国人居住者を中心に生活課題への対応も求められており、実践的論考も見られる¹⁷⁾。

また、不登校経験者が夜間中学に通うにあたっては、人間関係を経験的に学ぶことが重視され、社会的自立へのバイパスルートとしての意義が大きい。この点においては昨今の若者自立支援における学びの議論との関連を検討すべきであろう。

2. 若者支援の側面から

1) 夜間中学における二つの可能性

若者自立支援は、2005年から2009年にかけて実施された「若者自立塾」事業の中でも現場レベルの交流を通じた研修活動が行われていた。しかし、自立への学びを組織するにあたり、ケア（居場所）重視か自立訓練重視かで対立する場合がよく見られたという。

そもそも夜間中学に不登校・引きこもり経験者が通うこと自体大きな精神的ハードルを伴う。それは、多くの

夜間中学が彼／彼女らを否定した学校教室を使って授業を行っているからである。しかし、一方で自らを否定した「学校」に受け入れられる体験を通じ、直接的に以前の「学校」で負った傷をケアすることも可能である¹⁸⁾。もちろん、中卒という資格を名実共に手にした後は上の学校への進学道も開かれ、社会に出る道も再び開かれるのである。

2) 「移行期」の学び

若者が夜間中学で「学び直す」ことにはどのような意義をもつのか。この点について鈴木聡の論考から見いだすことができる。

すでに1990年代から顕著に見られた若者の自立困難の諸相について、鈴木は学校や家庭を通じて文化財を得ることで継承されていた世代サイクルの危機であると指摘する¹⁾。当時から見られた「移行期」の青年を「学童期」のように学校や家族、社会で丸がかえにし、一方では専門家が個別心理的にケアをしようという風潮には強い警告を発している²⁾。鈴木は中井久夫の「治療文化」論³⁾の検討を通じ、生産活動（労働）のみを社会復帰の基準で見るとはならず、比較的自由なコミュニケーションを含む消費活動などを通じ生活基盤を拡大し「世に棲む」方法を自分なりに獲得することの意義に注目している⁴⁾¹⁹⁾。つまり、不安定な「移行期」にこそ、旧来の学校や家族、社会との関係をこえ、「ナナメの関係」による新たな「社会づくり」、青年が生きていける新しい「文化づくり」の可能性があると⁵⁾。

また、山崎の論考を引き合いに出し、社会要求による知的水準を追求する限り、国家が教育について強制力を持つことを認めざるをえないとして⁶⁾、画一的でかつ若者にとって所与のものとなる国民共通教養の考え方そのものについて批判的に論じている。そこで、各々がローカルな基盤を持った「最良の素人」として、コミュニケーションを通じて共通教養の作り手となることに移行期の創造的学びの可能性を見いだしている。⁷⁾

つまり、夜間中学で若者が学ぶ意義として、

- ・教師や他の生徒と「ナナメの関係」を取り結び、夜間中学の中で生活基盤を拡大する中で、かつて「学校」で受けた傷を癒していく。(学びによる治癒)
 - ・「ナナメの関係」で結ばれたクラスの中で自らも発信者になり社会で生きていくための「言葉」を獲得する。(学びの自主的社会化)
- があると考えられる。

3) ソーシャル・キャピタルと基本的信頼の獲得

移行期の学びにおける鈴木の議論から、夜間中学には「学びによる治癒」と「学びの自主的社会化」の可能性

を指摘することができた。しかし、この2つのプロセスがどのように自立への学びに結びつくかについては、平塚眞樹の論考を糸口に検討をすすめたい。

平塚は社会なき社会における他者や社会に対する不信の蓄積こそ社会的自立への学びを遠ざけるものとし、社会・他者に対する「基本的信頼」の醸成を等しく若者に保障することが必要であると指摘している⁸⁾。そのためにはあらゆる社会を再生する学びに参加する経験が自己に対する「基本的信頼」を形成すると述べている。一方で、信頼に媒介された関係性であるソーシャル・キャピタルの平等性を、能力形成の条件として保障することの必要性も提起している⁹⁾。

すなわち、夜間中学に通う若者は、「学びによる治癒」によって他者に対する「基本的信頼」を得、さらに「学びの自主的社会化」によって自己に対する「基本的信頼」を得、自立への学びに結びつくのであろうか？実際には、教科の学びとクラスなどにおける仲間づくり^{注20)}が並行して進行している。「基本的信頼」をベースにしつつも「学びによる治癒」と「学びの社会化」が自立への学びに螺旋状に展開するためには、学習者がそのクラスや学校、社会への関わりの質を問うことが不可欠であると考えられる。

この点について、宮崎隆志の移行過程の媒介項としてのソーシャル・キャピタルの理論的把握によって視座が得られる。

宮崎はソーシャル・キャピタルと信頼を区別し、さらに信頼についても、「自己の存在に関わり他者関係の展開を支える基盤に位置する基本的信頼」、「同質的であることを特徴とする特定の他者に対する信頼」、「異質性を前提とした不特定の他者に対する信頼」の三層構造の総体として理解すべきと述べている。ソーシャル・キャピタルについてもその内実や構造に即した分析を必要とし、ケイパビリティの保障を求めるような正義を仲立ちにソーシャル・キャピタルと信頼と関連づけている¹⁰⁾。

また、センの「諸個人は社会環境を作り出すエージェント」という理解を引き合いに出し、ヌスバウムのケイパビリティ論を整理しつつ、内的に存在するように見えるケイパビリティが外的条件によって支えられていることを明らかにしている¹¹⁾。その外的条件をつくる「発達のケイパビリティ」によって「エージェント」の形成に結びつくとした。つまり、ケイパビリティ（潜在能力）の形成と発揮に必要な条件を獲得する学びは、文化や社会の創造への学びにつながると考えられる。

これらの議論から、夜間中学における若者の学びには「学びによる治癒」、「学びの社会化」に加え、学びのプロセスを自ら学習者の協働によって展開することによ

て得られる「学びの自主化」が要素として考えられる。学習過程の中でこれらの学びの性質がどうあらわれるかについて事例による検証を必要とする。中でも、学習者が学習環境すなわち「学びの場」へどう関わったかを分析軸にすることは有効であると考えられる。そこで、ある事例から、夜間中学を軸にした若者の学習過程を明らかにする。

Ⅲ. ある若者の夜間中学の学び

Kさん（25歳、女性）は、ある大都市にあるA自主夜間中学を卒業し、現在は卒業生の学習サークルBの代表である。^{注21)}

1. 夜間中学入学前

1) 不登校の経緯

Kさんは小さいときから自己主張が苦手な子であった。幼稚園の頃から特定の子から嫌がらせを受けるなどがあったが、助けてくれる男子や先生の存在によって「嫌でも通い続けることはできた」という。しかし、嫌がらせはエスカレートし、小学校高学年になると「ばい菌」扱いや「空気」のように扱われいじめが恒常化した。そのような状況をKさんは数日休むことはあっても、教室の隅にいてじっとすることでしのいでいった。

中学入学の頃には、「幼なじみの子にですらどのように話しかけていいかさえわからない」状況であった。また、助けてくれるどころか相談にのってくれる先生すらいなかった。やっとの思いで窮状を作文にしたためたところ、職員室で衆目にさらされながらいじめについて問いただされたことも。さらにはいじめについて学校に断りもなく電話相談をしたと濡れ衣まで着せられた。そのような状況で、Kさんは不登校生活に入った。中学1年では1/3ほどの出席が、中学2年以降はほとんど学校に行くことはなかった。

このように、Kさんは学校に対する不信のみならず、コミュニケーション不全の状態が社会性に対する「負」の学習、他者への不信の蓄積により学校を通じた社会的関係の撤退に至ったのである。

2) 学校への復帰の模索

学校には行かなくなったKさんであるが、読書など自ら学ぶことはむしろ好きで、難解な化学書などを読みふけることもよくあった。母親の薦めもあり、何度か学校生活への復帰を試みている。

不登校がわかった直後の家庭の様子は他と同様に「何で学校に行かないの？」と責められる日々であった。こ

ここで、Kさんは初めていじめのことを両親に話すと、父親は「学校に乗り込んでやる」と憤り、不登校については理解してくれた。母親は（教育委員会の）相談室にかけあった。転校を持ちかけられることもあったが、先生が原因であると考えたKさん本人が断る。

Kさんの不登校に対し、比較的早い段階で両親の理解が得られ、現実的な対応を試みていることが伺える。

さて、その後のKさんは母親に連れられフリースクールに2ヶ所体験入学した。しかし、同じ世代の子が多数いる環境にはなじみず通うまでには至らなかった。また、カウンセリングは「会った瞬間に嫌気」がさして通うことはなかった。

結局、教育委員会が運営している「学習室」に週1回通うことにした。ここでは、午前は個々に勉強し、午後是一緒に通っている子たちと交流するというスケジュールであった。Kさんはこの「学習室」を卒業まで通い続けることができた。というのは、学習の時間でも隣の顔がよく見えないくらいの距離感があって落ち着いたこと、スタッフと生徒合わせても10人足らずという少人数だったから安心して通えたという。それでも、中学2年までは交流の時間に参加することはできなかった。

中学3年になってなじみの顔ぶれに安心できるようになったところで、先生に好きなスポーツ（卓球）に誘われたのをきっかけに交流の時間に参加するようになった。また、Kさんからカードゲーム（UNO）に誘うと気軽に乗ってくれ、少しずつ仲良くなっていった。しかし、その関係も卒業と同時に解消してしまう。

3) 高校への進学と不登校

外部との接点を持ちつつある中で卒業を迎えたKさん。卒業式後に証書を受け取りに行った学校で教頭から「これ受け取ったら中学にはもう入れなくなるけど」と言われた^{注22)}。しかし、Kさんは「学校と縁を切りたい一心」で受け取った。

進学は「学習室」出身の子もおり、毎日通わなくてもいいというのが決め手になり、公立のY高校通信制に入学した。しかし、入学式にみた教室にいっぱい人がいる光景や様々な格好の人に恐怖感を感じ、(全日制)の学校と変わらないイメージが根づいてしまい。その後、6年間全く通えない状態が続く。

この間、Kさんが家の外に出るのは、犬の散歩、自転車で買い物（スーパー、本屋など）、幼なじみに会う時だけだったという。長期化するにつれ、近所の目なども気になるようになり、日に日に肩身の狭い重だけが募っていった。家では家事もこなしていたが、家族との関係も自分の内面も荒れつつあり、この頃はリストカットもしていた。

年度替わりのたびに「いい加減、高校はやめなさい」と母親によく言われた。しかし、担任から「Y高は通わなくなる生徒はたくさんいるが、復帰もできる。」と言われ希望はもてた。Kさんは、来年こそは通いたいと思って手続きするがやはり通えないという繰り返しが続く。

後日、KさんはY高へ実際に行ってみたところ、普通の学校ではなく、通いやすいところだとわかる。だが、入学式の雰囲気はこれまでKさんを拒否し、傷つけ続けてきたトラウマを呼び起こし、さらに見えない壁となってKさんに立ちほだかったかのような状況で不登校生活を送ることになっていった。

2. 入学と変化の胎動

A自主夜間中学へは6年間の不登校生活の最後の頃、母親に紹介され3月の授業見学会に参加した。当初は母親と一緒に見学する予定だったKさん。急遽、一人で見学することになり迷ったが、時間がなく教室に飛び込んだ。A自主夜間中学の一斉クラスは、受講生25名、スタッフ15名近くの計40名と大人数であり、初めて見たKさんはひたすら居続けるのでせいっぱいだった。しかし、居続けられたことが自信になり、入塾を決意した。

A自主夜間中学は週1回夜に2時間授業を行っている。教科は国語、数学、英語、社会の4教科。授業の内容は小学校から中学校の一部までをカバーしている^{注23)}。学年1クラスの一斉授業が基本だが、授業担当者以外にもクラスでサポートするスタッフがついている。^{注24)}

Kさんが入ったクラスは、当時の会場が広がったこともあり人数が多くても毎回授業を受けても苦痛ではなかったという。「(教師からの)一方的ではない、受講生からも発信、反応がある」雰囲気もKさんにとっては安心だった。しかし、人と交流したくても方法がわからず、自分から話しかけることはなかった。周りからも「怖くて話しかけられない人」と思われていたとKさん自身、当時を振り返っている。

A自主夜間中学の授業内容は3年間通じて「簡単だった」というKさん。「大勢の人と一緒にいることに慣れたかった」という思いもあり、通い続けること自体に意義を感じていた。それでも、行事^{注25)}の参加は心のハードルがあり総勢150名余りが集まる中に入るのは躊躇し、1年の遠足は欠席している。

しかし、クラス発表・忘年会ではクラスの出し物の進行係を買って出た。その頃からY高校の生活に対しても、A自主夜間中学に対しても「誰かがやるまでだまっている」から「それならやってみよう」という積極的な思いを持つまでにKさんが変わりつつあった。

KさんにとってA自主夜間中学の1年間は、まさしく自分を表現できる場所を得るまでの期間だったと言える。この期間で、Kさんにとってこの「学びの場」の安心や信頼が形成されていったと思われる。

3. 大きな転機：テレビ出演

自らの居場所を得たKさんは、2年次にスタッフをも驚かす大きな「冒険」に出る。それは、長時間にわたる取材やロケもある、NHK教育テレビへの出演であった^{注26)}。当初は「あまり大きいこととは考えず」、「(自分に)チャンスがまわったら活かしたい」と思い引き受けたKさん。番組の内容にも興味をひかれたようで、「学ぶことについて迷いがあるので、相手に話しながら考えたい」という思いで取材に望んだ。

しかし、結果は取材した側に対する違和感がぬぐえず「消化不良に終わった」という。特に、学校に行かない「学び」をとりあげようとせず台本通りの会話を要求されたことにより、自分の思いを確認しながら相手に伝えることはできなかったようであった。

Kさんにとってこの1年は、学ぶことの意味や学びの場について自らを振り返りながら模索する機会になったようである。

4. 卒業時の決意

A自主夜間中学3年のKさんは、様々な「出番」が待ち受けていた。Y高校では部員が一人になったのを契機に所属している部の部長として勧誘活動の先頭に立った。また、この年から始まった夜間中学交流集会の席でA自主夜間中学受講生を代表して5分ほどのスピーチを行った。A夜間中学の周年行事の席でも受講生代表の一人として生活体験発表を行った。これらの機会を経てKさんは人前にでることに「場慣れ」してきたという。

また、クラスの受講生との関係も特に深いつきあいのクラスメイトやスタッフはいなかったが、同世代の人が一人しかいなかった分過ごしやすかったようである。このような場合、卒業後も再履修という形で残りたいと思う受講生がほとんどだが^{注27)}、「残りたい」という思いはKさんにはなかったという。

ただ、今までのつながりは保っていたという気持ちはあった。さらに会場が移ってから他の受講生と話す時間が限られてきた^{注28)}こともあり、周りの受講生も同じ思いを持っていることもKさんは知っていた。

一方、A自主夜間中学の卒業文集にKさんは自分が超えられなかった「壁の穴」の先の自分に期待したいと綴っている。^{注29)}

このようにKさんのA自主夜間中学卒業までの1年間は、自らを外に表現する経験を積んで学びに対する自らの思いを形にしつつある期間だったといえる。

5. 新しいサークルをつくる

Kさんたちの卒業と同時に、新しいサークルづくりが進められた。Kさんは初日の会合に顔を出す程度のもりで参加した。一方でA自主夜間中学ではスタッフとして新たなスタートをしている。

新しくつくられた学習サークルBは、会員である学習者が学びたいことを持ち寄ってみんなで学びあう、サークル名から学習形式も内容も全て自分たちで決め、運営も自分たちの手で行う^{注30)}。これは、はじめからある程度学ぶことが決まっていたA自主夜間中学とは全く異なる学び方になった。

メンバーは顔なじみでも雰囲気は全然違うサークルの活動にKさんは興味をひかれつつあった。少人数^{注31)}で昼食も一緒にとるほど顔がいつも見える関係。自由だけと遠友塾を卒業して学びたいという同じ志のもと、強い結束力。これらの良さを実感していた頃、他の学習者から推薦されて代表に選出される。このときも、Kさんは難しいことは考えず「やってみようか」という思いだったという。その席でKさんは「みんな、協力して下さい」と学習者に声をかけていた。実際、みんなが運営に協力してくれていることに手応えを感じており、通信第1号に掲載された文章からはA自主夜間中学で得られた「学びの場」を自分たちの手で大きくしたいという思いが込められている^{注32)}。

この年のKさんは「出番」を自ら得たり、広げたりという試みに積極的であった。Y高校の生活体験発表会は最後の経験と思い自ら立候補した。筆者が声をかけた教師の研究会の発表には初めて20分という長時間の報告に挑戦した。その後、別の研究会で依頼された活動報告では他の学習者に話してもらおうべく、自らコーディネートを買って出てくれた。

Kさんは学習サークルBを実質的に作りあげる取り組みに中心的に関わることで、「学びの場」づくりをコーディネートする立場にもなりうる可能性を周囲に感じさせるまでに成長しつつある。

IV. 夜間中学の「学び」の再検討

1. Kさんの学習過程

KさんはA自主夜間中学及び学習サークルBによって社会的自立への学びを深めたと考えられる。夜間中学に

たどり着くまでを含めると以下のような学習過程を経ていると考えられる。

1) 一度目の不登校に至るまで

Kさんは、幼稚園から中学時代まで徹底して「いじめ」にあっている。同世代とのコミュニケーションについて年々その困難さ、恐怖感を増しつつあったKさんはまさしく他者に対する不信が蓄積された時期でもあった。しかし、小学時代まで何とか学校に通うことができたのは自分を守ってくれる他者（児童，教師）がいたからに他ならない。

その他者が学校から姿を消した中学時代に彼女は学校に居続けることができなくなる。その時点で不信の対象は学校や社会にも向けられるようになった。不幸中の幸いとしては、家族がある程度受け入れることができたため、家族関係から撤退することまでには至らなかったようである。

2) 学びによる治癒（その1）

Kさんは中学時代の不登校期、「学習室」に通ううちに「何を話せばいいかわからない」他の生徒に対してコミュニケーションがとれるようになっていた。また、自分から遊びに誘うようにもなっていた。

このことから、「学校」で得た傷が経験的に癒えつつあることが伺える。「学校」ではコミュニケーションの学びからは疎外されていたが、「学習室」内では一定の距離を置きつつ同世代との関わりが作れるようになったと言える。

しかし「学習室」はそこで完結する閉じた場であり、本来の「学校」の雰囲気とも異なる。そこで、Y高校通信制に入学したKさんが再び自分を傷つけた「学校」の雰囲気を初めて入った教室で感じ取った時、再び不登校生活に戻ってしまうのである。しかも、今度の不登校は代わりに外との接点が持てないまま、6年と長期化してしまうのである。

3) 学びによる治癒（その2）

Kさんは母親の紹介でA自主夜間中学に入学する。はじめは、学習室より遙かに多い人数での授業に「その場に居続ける」だけで精一杯だったが、居続けられただけでも6年間の不登校の頃と比べても自分が成長したと実感できていたようである。また、自分が苦手とする同世代の学習者やスタッフがいないことも場慣れにさほどの苦労はしなかったようである。1年の頃は他者に話しかけることもなく、とりあえず「自分はここにいてもいい」という実感が彼女の通学意欲を支えていたようである。一方でクラス発表の進行役を引き受けるなど、人

前に出る機会も担えるようになり、「学びの社会化」の萌芽が見られる。

4) 学びの社会化

A自主夜間中学2年から3年にかけてKさんはテレビ出演や人前で自分の生い立ちを発表するなどの機会を立て続けにこなしていく。また、Y高校でも同様の機会に意欲的に取り組む。テレビ出演に象徴されるように自分の思いを試行錯誤しながら積極的に外部へ発信し続ける。多くの場合は相手に自分のメッセージが受け止められたことによって自信が付き、基本的信頼の範囲もより広がったと考えられる。

5) 学びの場を問う（自主化への契機）

KさんはA自主夜間中学を卒業後、B学習サークルの立ち上げに参加する。その契機は2年のテレビ出演で「学び」に対する思いが一般的「常識」と異なっていたことや卒業前に新しい学びの場への思いをクラスメイトと語り合っていたことがあげられる。

このように自分の傷を癒し、社会へ出る意欲を形成した「学びの場」に対し、その意味や疑問を持つ機会が得られたことにより自らその場をつくろうという「自主化」への契機になったと言える。

6) 学びの自主化へ

Kさんも参加した学習サークルBは、自分たちの学習計画を話し合いで作り、運営も自分たちで行うなど、協働により学びを自主化しつつあると言える。その中でも代表になったKさんは、自らも社会への発信者になる一方、活動を組織する側に回り、他の学習者が発信者になる手助けをした。さらに現在では学習者の話し合いをまとめる役も担っている。このことから、Kさんは学びの担い手となり、自主化をすすめていると言える。

2. 夜間中学における自立への学び

Kさんの学習過程だが、以下にまとめられる（表1）。

表1 Kさんの学習過程

	学びの場	学びの性質	学びの場への関わり
1	学校	(適応型)	場への適応(できず)
2	学習室 Y高校	治癒 (適応型)	ここにいてもよい 場への適応(当初はできず)
3	A夜中1年	治癒	居続けられる
4	A夜中2年	社会化	自分を表現できる
5	A夜中3年	社会化	学びの場への働きかけの模索
6	サークルB	自主化	協働化しその担い手に

また、3つの学びの性質の意義と関連について以下のようによまとめられる。

1) 学びによる治癒と学びの場

Kさんは学習室でもA自主夜間中学でも「学びによる治癒」が得られていた。しかし、前者では学びの性質が展開することなく、学びの場が変わることでまた不登校という学びの場からの撤退が起ってしまった。

これは学びの場のもつ機能による違いが主要因と考えられる。学習室では、周りからの働きかけや環境によってKさんが他者と関わるよう「ふるまえた」ように見える。つまり、「治癒」されている、受け身的な状態である。一方、A自主夜間中学では、自らの意思によって「居続け」たり、「出番を引き受け」たりすることで、居心地の良さを実感するようになっている。学習者の年齢や動機がKさんとは違うため「異質」な場ではあるが、ここでの「治癒」には自ら行動したことで得られたものもある。

つまり、学びの場のもつ機能により、「学びによる治癒」で終わるのか、「学びの社会化」へのステップにつながるかが決まると考えられる。

2) 学びの社会化の論理

KさんはA自主夜間中学2年以降、自らを表現できる場をクラスからY高校、マスコミなどを通じ社会へと広げていった。表現した結果、他者がどう応答するかでKさんが他者や社会へ発信できる言葉の獲得と「世界」の広がりという視点の学習成果が決まっている。しかし、マスコミ取材に対する違和感や卒業に向けたクラスメイトとの会話などをきっかけに、KさんはA自主夜間中学という学びの場についてその意義や自分の思いとの違いについての気づきが見られた。

つまり、学んだことを活かして自己を表現するのは、学びの場で期待されている「言葉」、学びを組織している側の論理に止まるという限界をもつ。このことは、平等をめざした教育やソーシャル・キャピタルが排除の論理をもつ可能性とも関連する。学びの社会化が従来の学校教育のように適応を求めるとのみで止まらないためには、学びの場に対する疑問を持ち、対立や自ら働きかけるプロセスを必要とすると考えられる。このことは、学びの自主化への道をひらくことにもつながる。

3) 学びの自主化と社会的自立の方向性

KさんはA自主夜間中学に対しては、その学びの場に対して自分を異化することはあっても直接働きかけることはなかった（できなかった）。しかし、自分やクラスメイトの求める学びを自分たちで協働することで実現す

ることができつつある。これはまさしく学びの自主化といえる。

一方でKさんは社会に出ることについて「大きな壁」があると不安を持ち続けている。しかし、この年は自らを傷つけてきた学校の教員に向けて自分の思いを発信し、応答してもらえる機会を得ている。さらには学習サークルBの活動はKさんにとって「元気をもらえる」場でもある。つまり、学びによる治癒、学びの社会化をも「自主化」している側面も伺える。

V. おわりに

本論文では、夜間中学における若者の学びを通じて、社会的自立に向けた学びの三つの性質及びその関連を明らかにした。学びの場との関連を含め、以下のように構造を提示できると考える。

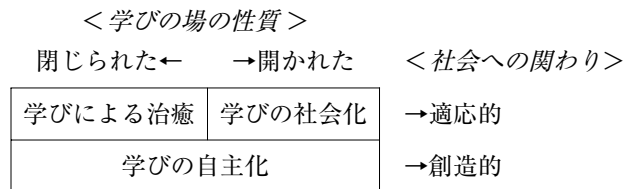


図1 社会的自立への学びの構造

学校などの既存の教育に対して夜間中学はオルタナティブな学びと言われている。しかし、支援する側が設定する学びの場（環境）の更新可能性なくして、社会への関わりは適応的になる問題をもはらむ。つまり、オルタナティブな学びに対する「オルタナティブ」を学習者が構築することを保障することが、創造的な学び、ひいては社会的自立へ結びつくと言える。

しかし、今回のKさんの事例検討だけでも、社会的自立の質について十分に検討ができなかった。この点については、学校や社会（労働、消費、ネットも含む）、家庭との関わりの変化をより詳細に検証する必要がある。また、夜間中学で得られる「知」との関連については、学校教育と違い学習者のニーズによって大きくカリキュラムも異なることから、公立、自主問わず様々な形態からの検証を今後行いたい。

注1) 全国夜間中学校研究会が2000年10月実施の国勢調査を基に試算。

注2) 見城慶和『夜間中学校の青春』（2002）などを参照

注3) 週5日制、専用の教室、専任の教員の配置、授業料無料、就学援助、給食 など

注4) 全国夜間中学校研究会『第56回全国夜間中学校研

究大会資料集』(私家版)などによる。

注5)「学齢期に修学することのできなかった人々の教育を受ける権利の保障に関する意見書」。趣旨は、以下の2点である。

- ・義務教育未修了者の実態の速やかな把握を行政の責任で行うこと。
- ・義務教育未修了者に対する学びの手立てについて、あらゆる手段を講じる努力をすること。(これには公立夜間学級の増設のみならず、ボランティアによる教室(自主夜間中学)への支援、家庭教師の派遣なども含まれる)

注6) 人権救済意見書提出後、千葉市や和歌山県で公立夜間学級の検討がなされたが、「ニーズがない」などの理由で設置には至っていない。しかし、「ニーズ」の把握の方法が極めて不透明であり、かつその定義については関係者との交渉で議論されていないためその理由の正当性に強い疑問が残る。

注7) 全国夜間中学校研究会のまとめによると、全国に自主夜間中学は25ヶ所ある。北海道には札幌、旭川、函館、釧路の4ヶ所にある。

注8) 『平成21年版 厚生労働白書』による

注9) 全国ひきこもりKHJ親の会の調査による試算 (<http://www.khj-h.com/kouzou.htm#hikisu>)

注10) 全国ひきこもりKHJ親の会ほか『「ひきこもり」の実態に関する調査報告書②』等による

注11) 中には「はぐれ雲」(富山県富山市)のように不登校児も含め、社会に(働きに)出ることを主眼とした自立支援を30年余りにわたって続けている施設もある。

注12) 公立夜間学級では「形式卒業」であったにせよ、中卒の受け入れは法的にはかなり難しいと言われていた。しかし、東京都では夜間中学教員の働きかけにより、夜間中学入学を希望する不登校児が昼間の中学を「除籍」することで正式に夜間学級に通えるシステムを確立している。

注13) 記録映画『こんばんは』に出てくる「伸ちゃん」や省庁要請や発表の場に積極的に参加し自らも教師になったTさんの例がある。

注14) 全国夜間中学校研究大会資料集及び記録誌を参照

注15) 東京都など公立夜間中学によっては、日本語の習熟度や世代、進路希望などを鑑みて、学年の区別無くクラス編成を行う学校がある。

注16) 広島県では、中国残留日本人の受け入れを中心に進めているため、日本語学習へのニーズは「熱烈」であるが、他の教科の授業の出席率は大幅に下がるといった現象も見られる。

注17) 保見ヶ丘ラテンアメリカセンターにおける識字と

生活支援との連動については野元弘幸(2006)「外国人の子どもたちの排除の構造と対抗的教育実践の原理」日本社会教育学会(編)『社会的排除と社会教育』(日本の社会教育 第50集)、釧路自主夜間中学「くるかい」における福祉行政との連携については添田祥史(2010)「学習を権利で保障すること」『社会教育・生涯学習研究所年報2010』を参照のこと。

注18) 先述のIさんのケースでは、小学校時代の担任の教師と和解し、改めてIさんのための手作りの卒業式が行われたとのこと。

注19) 若者の自立や社会復帰における消費先行による学びの提起については、斉藤環(2000)『社会的引きこもり』、工藤啓(2009)『16才のための暮らしワークブック』など。

注20) 多くの夜間中学では、若年生徒にとって年上どころか自分の祖父、祖母のような生徒に囲まれて学校生活を送る場合が多い。それでも、本人にとっては「ナナメの関係」で結ばれ、(昼間の学校のクラスの)同年代集団では得られなかった安心感や居心地の良さを得ることができることも多い。

注21) 調査方法としては主に筆者からの聞き取りであるが、筆者はA自主夜間中学、学習サークルBのスタッフでもあるため、彼女の4年間近い活動の振り返りという形ですすめられた。

注22) この先生が東京都のように「除籍」→夜間中学というルートを理解してのことかどうかは不明である。

注23) Kさんが通った3年間の授業内容は表2の通り。

注24) A自主夜間中学では、ボランティアスタッフが授業及び運営を担当する。スタッフはクラスの受講生の学習を支援することが共通の役割になっており、教科に関係なく1日同じクラスで受講生と共に過ごす。

注25) A自主夜間中学の全校行事は遠足(10月)、クラス発表・忘年会(12月)などである。

注26) 「一期一会」という番組で、Kさんが中卒プロレスラーで勉強の大嫌いなIさんに学ぶことの大切さを、授業を見てもらいながら説得するという内容。

注27) A自主夜間中学では授業内容がわからないなどの事情があれば同じ学年を繰り返したり、戻ったりすることができる「再履修」を認めている。

注28) A自主夜間中学はKさんが3年になってから公共施設から学校教室へ会場が移った。学習環境の上では大きなプラスではあったが、授業開始前の会場使用時間がほとんどなく、受講生の交流や個別の相談にスタッフが対応する時間が限られてきた現象も見

られた。

注29) A自主夜間中学では3年間のまとめとして卒業文集を制作している。特に国語では、自らを表現する集大成としてカリキュラムの要に位置づけている。その時のKさんの文章は資料1の通り。

注30) 学習サークルBについて筆者は立ち上げからコーディネーター、「助っ人」(学習者が必要とするときだけ手助けする)として関わっている。

注31) 学習サークルBは正会員(学習者)5名,助っ人(スタッフ)7名で発足した。

注32) 学習サークルB通信第1号(5月)にKさんが寄せた文章は資料2の通り。

引用文献

- 1) 鈴木聡：世代サイクルと学校文化, pp.3-15, 日本エディタースクール出版部, 2002
- 2) 前掲, pp.49-53
- 3) 中井久夫：治療文化論, pp.111-112, 岩波書店, 1990
- 4) 前掲, 世代サイクルと学校文化, pp.69-73
- 5) 同上
- 6) 山崎正和：近代の擁護, pp.121-122, PHP 研究所, 1994
- 7) 前掲, 世代サイクルと学校文化, pp.156-179
- 8) 平塚真樹：次代をひらくシティズンの形成, ニート・フリーターと学力, pp.258-p282, 明石書店, 2005
- 9) 平塚真樹：移行システム分解過程における能力観の転換と社会関係資本, 教育学研究, 73(4), pp.376-390, 2006
- 10) 宮崎隆志：ソーシャル・キャピタルとケイパビリティ-移行過程支援との関連で-, 社会教育研究, 27, pp.15-30, 2009
- 11) 同上

表2 A自主夜間中学18期生の授業内容

	1 年 生	2 年 生	3 年 生
国	☆ひらがな、カタカナ五十音 ☆かなづかい 長音・促音・拗音 ☆国語辞典の引き方 ☆漢字の成り立ち ☆漢字の組み立て 部首・点画・画数・筆順 ☆漢和辞典の引き方 ☆文のつくり 主語・述語・修飾語 ☆句読点 ☆原稿用紙の書き方	☆慣用句 ☆小説「密柑」 ☆新聞記事 ☆短歌・俳句・川柳 ☆一行詩の創作 ☆熟語 ☆ことわざ ☆手紙の書き方 ☆エッセイ「ごはん」 ☆故事成語 ☆詩「君死にたまふなかれ」 ☆群読「心に太陽を持って」	☆小説「走れメロス」 ☆敬語について ☆漢文・漢詩 ☆説明文「せんこう花火」 ☆紀行文「知床 命のうつくしさ」 ☆新聞記事 ☆原稿用紙の書き方 ☆助詞について ☆同音異義語 ☆詩「落葉松」 「ぼろぼろな駝鳥」 ☆古文「瓜姫物語」
数	☆数について ・数学について ・位取りについて ・数のもつ意味 ☆四則計算 ・たし算(加法) ・ひき算(減法) ・かけ算(乗法) ・わり算 ☆小数 ☆いろいろな計算	☆図形 ・直線、角、高さ、平行 ・図形の定義 ・図形の面積 ・立体の体積 ☆分数 ・整数の種類 ・分数の種類 ・分数の計算 ☆割合 ・比と比の表し方 ・百分率と歩合 ・グラフ	☆正と負の数 ・正、負の意味 ・数の大きさ ・正負の計算 ☆文字式 ・文字式の約束 ・文字をつかった計算 ・分配の法則 ・同類項 ☆方程式 ・方程式の意味 ・等式の性質 ・方程式を解く
遠足	中島公園	北海道大学付属植物園	三岸好太郎美術館 北海道知事公館

	1 年 生	2 年 生	3 年 生
英	○アルファベットという字体に慣れる、ローマ字を読む ☆アルファベットのローマ字表記 ・アルファベットって何だろう ・アルファベットの歌 ・小文字、大文字 ・ローマ字表 ☆看板を読んでみよう ☆自分の名前をローマ字で書いてみよう	○英語で簡単なやりとりが出来る ☆ローマ字と英語 ・アルファベットの復習 ・ローマ字と英語の違い ・表示の言葉 ・辞書の引き方 ・数(1~12) ☆自己紹介 ・名前、出身地、職業 ☆持ち物 ・I have..... ☆冠詞(a, an)	○自分の一日の動きを通して、いろいろな動詞や名詞に触れる ☆時刻 ・大体の数 ・時刻の表し方 ☆私の一日 ・起床、洗顔、朝食 ・何時に何を ・食事 ・お出かけ ・帰宅 ・余暇 ・シャワー、風呂、就寝 ☆日記を書く
社	○北海道について考える ☆地図に親しむ ☆北海道を知る ・北海道の地理 ☆都府県巡り	○日本について考える ☆都府県を知る ☆日本の歴史を知る ☆国内図上旅行	○社会について考える ☆日本の政治 ☆環境問題 ☆日本の経済 ☆卒業文作成「私の願い」 ☆社会見学:白石清掃工場
歌	藤月夜 みかんの花咲く丘 この広い野原いっぱい 夏は来ぬ 知床旅情 かあさんの歌 ふるさと 浜辺の歌 月の砂漠 里の秋 青い山脈 時代 四季の歌 切手のないおくりもの たき火 もみじ 冬の夜 ジングルベル 翼をください 今日の日はさようなら 荒城の月 明日があるさ スキー 上を向いて歩こう 大きな古時計 パラが咲いた 手のひらを太陽に 花 とんぼ 鉄道唱歌 リンゴの歌 見上げてごらん夜の星を 冬景色 夕焼け小焼け 風 そうさん やぎさんゆうびん 赤鼻のトナカイ 追憶 北上夜曲 いい日旅立ち 雪のふる町を 遠友音頭 夜間中学生		

資料2 Kさんが書いた記事

A自主夜間中学18期生が集まり活動している学習会『学習サークルB』第1回目のイベント、花見の開催もぶじにおわり、方向性もそこそこ決まってきて、やっと学習会らしい活動がはじまりました。

参加者の希望によって学習の内容をきめられる今、話し合って数学と英語、数学は分数の割り算から、英語は日常会話をやっていこう、と遠友塾ではふれないような手法を使ったりしつつも、遠友塾で行っていたことの基礎が生きてくる。世界情勢をふくむ社会、書道、理科をやりたいなどの声も上がっている。

どれが、何が実現していくのか、そのすべてがまだ若いこのサークルは決まっていな。いいかえれば、それは自分の声が決めていける可能性があるということもできる。みどりの仲間、植えた種がやっとな芽がでて、本葉まで育ってきたような…。

人と人との距離が近く、和気あいあいとした雰囲気。あちらでは席は遠くはなれていても、同じ場所、同じ空間で、同じ目的をもって3年間集まっていた、というきおくが、まだここにはあります。

(学習サークルB 通信第1号 2010年5月発行)

『壁の穴』

資料1 Kさんの卒業作文

私にはまだ越えられない壁がある。渡れない谷でも抜けられない穴でも何でもいいのだが、こりあえず壁にしても穴でもなく、

私には、越えられない壁がある。三年、三十六ヶ月、一〇九五回。

文字にすくめて長いもののように感じられるが、ふり返ってみればその時はたまたまのうちは、

今でも私は三年前、ここに来たときの気持ちを思い出すことが出来る。自分を後ろから見ると、

見学会の初日、一人でA自主夜間中学

に訪れた私は、案内された三年生の授業風景を、後ろに、はじっこ、と消え去りたような気持ちで座って見ていたと思う。

ゆるやかな雰囲気の授業、それを自分の前で遮断するような、そんな私がいたと思う。

あの見学会に行かなければ、私は、ここにいなかつただろう。その日、見ていた中味が私に決断させたのではなく、

行けたという事実が、私に、ここに、遠友塾に行こうと思わせた、行へるだけ腹を決める理由になつたと思う。

その日に見た、授業の内容や、雰囲気ではなかつたように思う。

なぜなら、

今、この場で感じている遠友塾の雰囲気も

人の温かみも、すべて自分の前で遮断して、私はあの場にいたのだから、そう思うからだ。

二回目、付き添いを得て二度目の見学会にのぞんだ私は、やっこで遠友塾にふれた

ような気がする。ここにきて三年、共に学ぶ人々はよく私に

言ってくれる。私は変わった。自覚はうすいが、変わったのださう、たしかに。

私は今、Aに通いながら通信制の学校に通い、そして週に一度は必ず筆を持ち、書

にふれる生活をしている。公募展に出品する作品を選別しながら、一年前の作品も持ち

出してみた。変わっていた。もうあのころの字は書けないし、あのころ

の私に今の字は書けない。字も人も、変わっ

たのださうと実感した。目に見える歴史だっ

た。冒頭に戻るが、私には越えられない壁があ

る。越えられなければそのうち生命にかかわ

るのでないかという壁だ。だがそれも、周

田の方が良い方へ変わった、と言ってくれ

るその変化があれば、いつか、近いうちに越

えられるのではないかと。私は自分に期待

したい。

越えられないなら、穴を開けるほどの、何

か、を。

壁の穴をぐぐり抜けて、その先に至る自分

を、私は私に期待する。

おかげさまで、今私はここにいます。その

言葉を、壁の向こうでもう一度、誰かに。

The Support System for Young People in Night Junior High School

Hiroki Inoue (Hokusho University)

Abstract

In Japan, some young people go to evening junior high school, because they couldn't go to daytime school or job. They are not only learning vocabularies and theories, but to be self-supporting in society. Accordingly, I gave consideration to a young woman's case from three points of view ; heal, socialization and self-independent by learning.

As a result, it was clearly obvious that young people can heal psychological wounds that they got in daytime school or job, and also learn how to acquire their basic trust in society. To learn the formation of society, a learner should go into community where responds his self-decision, in process of learning.

Key words : Backdrop of recluse, Community independence, Basic trust for community, Using of transition